

怖いんだ

さめてしまうのが

だからこの思いを小箱にしまつて
鍵をかけたい

けれど、恐怖ははずれ鍵穴から

ひっそりと抜け出して

戻ってくるんだ

だから君と一緒に閉じたい

鍵穴を二つにわけて

出口を細めて

そうすれば、わずかに溢れるだけだから

繰り返しくりかえし

鍵を回して
穴を狭めて

僕は安心して
君と眠りたい

思い出を絞首台にかけていく

お父さん、有罪

お母さん、有罪

お友達A、有罪

お友達B、有罪

ほか多数、有罪

そして私、有罪

空っぽの輪

擦れてちぎれる

最後に残ったのは、彼女だけだった

Listen,

[illegible]

次章予告

助けて、と彼女は言った。
私は、気にもしなかった。

他愛のない日々の眩きだと、そう勝手に思ったのだ。

——九月の終わり、かつての友人が私を訪ねてきた。

何ら理由はない。ただ近くによっただけ。彼女はそう言った。

.....

重力に服従するその手を掴む。引きずられる体。だがすぐに軽くなった。

彼女は飛んだ。開放を目指して。この世界から逃げたくて。

割れた頭蓋から覗く脳。タンパク質の塊。心の壁。

私は吐き出した。